

1. _____ 4. _____
2. _____ 5. _____
3. _____

専 門 科 目 試 験 問 題

次の問題Ⅰ、問題Ⅱをそれぞれの指示にしたがって解答すること。

解答には必ず所定の解答用紙を用いること

予定履修コース	受験番号
I II III	

※ 予定履修コースは、受験票に記載したものと同一のものに○をつけること。

専門科目試験問題

問題 I.

受験票に記載した予定履修コースに関する問題から 1 問を選んで所定の解答用紙に日本語で解答すること。

履修コース I

1. どの言語も常に変化していくが、その程度にはかなりの差が見られる。この差は何に起因するものと考えられるか。具体的な例を挙げながら説明しなさい。
2. 今日の日本における多様な種類の食事を供するレストランの林立現象を、文化多様性 (cultural diversity) の視点で論じなさい。
3. アメリカ大統領演説などで多用される “global community” という言説について、今日の国際情勢を視野に入れて論じなさい。

履修コース II

4. 言語教育における語用論的観点の必要性について、具体例を挙げて論じなさい。
5. 日本は少しずつ多文化・多言語社会へ移行していると言われている。この状況を説明するためにどのような社会言語学的枠組みが考えられるのか、例を挙げて説明しなさい。
6. E-mail によるやりとりは、従来の手紙などどのような相違があるか、コミュニケーション論的観点から論じなさい。

履修コース III

7. 広い範囲の自然言語文に対して 98% 程度の解析精度を有する構文解析プログラムが利用可能であるとき、このプログラムの外国語学習支援システムへの適用について論じなさい。
8. 次のデータから日本語の動詞の種類についてどのようなことが言えるか、論じなさい。
 - a. 「女の子はその小説を読んでいる最中だ。」という文をもとにして、「読みかけの小説」は言えるが、「*読みかけの女の子」とは言えない。
 - b. 「女の子は踊っている最中だ。」という文をもとにして、「*踊りかけの女の子」とは言えない。
 - c. 「その軍艦は沈もうとしている。」という文をもとにして、「沈みかけの軍艦」と言える。
9. 「そうですか。」の用法をいくつか挙げ、音韻論的・意味論的・語用論的観点から論じなさい。

問題 II.

受験票に記載した予定履修コースとは関係なく、以下の 7 つの問題から 2 問を選んで、所定の解答用紙に日本語で解答すること。

1. 広告が話題を集めても、売上げにはつながらないという現象がしばしば見られる。この現象について考えられる説明を述べなさい。また、このような場合でも広告が果たしている機能があるとすれば、どのようなものが考えられるか、述べなさい。
2. 文学作品を映画化した場合、もとの文学作品とは異なる印象を与えることが多い。その原因はどのような点にあると思うか。具体例を挙げて説明しなさい。
3. 近年日本では横書きの出版物が増える傾向にあるとされる。このように「左から右への横書き」が普及しつつある現状について、それは何故か、またそれをどう思うか、述べなさい。
4. 発話内行為 (illocutionary act) とは何か、その定義を説明し、さらに、ある特定の発話内行為を挙げ、それを遂行するための条件とルールを概説しなさい。
5. 以下の二つの文の[.....]の部分について、構成素のテストなどを用いてその統語構造の違いや意味の違いについて論じなさい。
 - a. [That student of Chemistry] works hard.
 - b. [That student with a short hair] works hard.
6. インターネットの普及により、ウェブ上にある情報は、印刷された文献と並んで、研究にとって不可欠の資料となりつつある。ウェブ資料を利用した研究の可能性と問題点を述べなさい。
7. 次の英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語のいずれか 1 つを選んで、その要旨を日本語で述べなさい。ただし、外国人留学生は日本語を選択すること。

(1) 英語

省略

(2) ドイツ語

省略

(3) フランス語

省略

(4) ロシア語

省略

(5) 中国語

省略

(6) 朝鮮語

省略

(7) 日本語 (外国人留学生のみ選択可)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言語音の直接伝達性あるいは象徴性(n)に、私がおそまきながら“耳をひらかれた”のは、日本語に劣らず擬音語、擬態語の豊かな黒人アフリカの言語社会に暮らしてみても、文字を知らない彼らの声の、アナーキーな輝きに触れたからだ。二年前、私が長く暮らしたアフリカの一地方の声や音具がつくっている音の世界の録音で構成したレコード・アルバム『サバンナの音の世界』を出したとき、それをきいてくれた友人の何人もが、「声がきれいだね」と感心していた。夜の露天のまどいで、かわるがわるなぞなぞやお話している村の若者やおばあさんや子ども。話すことのプロでもないし、発声訓練などを受けたわけでもない。いわゆる美声というのでもない。ただ、ひとりひとりの声に個性があり、輝きがあるのだ。文字を用いない彼らの生活で、声で上手に話すことの価値は絶対だし、多くの場合野外で、かなりの距離で、よく通る声で話さなければならない。村のあちこちの家囲いの露天の「にわ」に集まってやるお話やことば遊びは、声の伝えあいの、幼いときからのたくまざる鍛錬の場でもある。

元来 100% 声である言語を文字化し、文字を用いて言語教育を行なえば、ことばは規格化される。ことばは行儀よく飼い馴らされ、言語音やことばづかいの個人差や地方差も少なくなって、概念化された意味の通用範囲は拡大されるかも知れないが、ひとりひとりの声ももっていた、くせのある荒々しい伝達力は弱められてしまう。ことばの文字化と文字の普及が、いかに声としてのことばの個性を殺すかは、いまアフリカ諸国でもユネスコなどの援助でお上が進めている、現地語の文字化とその普及のための成人教育などに接してみればわかる。言語の文字化がもつ意義もある面では大きいのだが、文字教育によることばの規格化とは無縁に生きてきた人たちの声の、野放しの闊達さに打たれたあとでは、「ことばの意味」が通じるということも、一義的には考えにくくなる。擬音語、擬態語は、慣用として定着したものもあるが、声の直接の伝達力と前後の脈絡に依存するところが大きいので、話し手が社会の慣用にとらわれずに、自分の声で創作できる面がある。「ウマ」という代わりに、「ウシ」とか「ヤマ」といえば、約束に従って、その音のつらなりが意味するものはまったく変わってしまうが、「ウマ」が「ヒーン」といなくなるという慣用を破って、ある脈絡で「ブヘヘ」と啼いたといっても通じうるし、慣用を破った方が、個性的で新鮮な伝達ができる可能性がある。そこでは声の生みだすものは、約束に基づく記号体系としてのことばであるよりは、むしろ即興演奏の音楽に近い。言語音でも表現の幅はかなりあるが、その言語の音韻にはない声を使ってもいいのだ。

(出典：『聲』川田順造(1998)ちくま学芸文庫)

問1 下線部(1)の「言語音の直接伝達性あるいは象徴性」について、例を挙げながら、分かりやすく説明しなさい。

問2 「ことばの規格化」と擬声語・擬態語について、筆者の考えを簡潔にまとめなさい。

※印の欄は記入しないこと。

[illegible]

※印の欄は記入しないこと。